

いま「弁証法」について何を考えたらいいいのか
—— 橋本剛『思想としての弁証法』を読む ——

島崎 隆

83 歳にもなられて、著者がこうした理論的で、集中力を必要とする著作を出されたことに、まずおおいに驚かざるをえない。各章について、どれだけの期間で書き継いできたのか不明だが、それでも 70 歳を過ぎての理論展開であるだろうから、まさに脱帽せざるをえない。以下では、著者の『思想としての弁証法』*1 を紹介・検討しつつ、またそれに学びつつ、現時点で弁証法とは何かを再考したい。評者もある意味で、著者のような大先輩のあとを追って、弁証法というテーマの周囲を回りつづけてきたと実感している。全体を拝読したうえでの大雑把な印象からすると、長いキャリアに裏付けられた本書の安定した展開にはおおむね異論はなく、賛同したい点が多々あった。

一 本書の意図

さて、本書は「〈人間の自己疎外〉の謎を解く」という副題をもっている。そして第一部「弁証法の基本理解のために」は六章からなり、第七章以後の第二部「人間存在の弁証法」は三章からなる。第一部は弁証法についての入門的な基礎論的理解を試み、第二部はそれを踏まえて、ホブズ、ロック、ルソーらの近代の思想家を前提しつつ、ヘーゲル、マルクスを中心に自己疎外論、「資本の論理」などを詳細に展開する。「はじめに」にあるように、本書は一方では、「これこそ弁証法だ」と言い切れるものを読者に伝え、他方では、「疎外」の本質を深く展開しようとする。つまり弁証法と疎外論を意図的に結合しようとするものであり、そこに「思想としての弁証法」という考え方が成立するというわけである。

この意味で本書は、「方法としての弁証法」と「現実そのものの弁証法」を区分するが(29 頁以下)、評者自身、かつてこの両者の弁証法の区分を構想したことがあった。現実についての「思想としての弁証法」は、実質的には疎外論の内容に一致するといえよう。そして他方、論理や方法として弁証法を考えると、そこに弁証法的論理学や弁証法的カテゴリー論、弁証法の三法則論(法則は三つに限られないが)などが成立し、そこで、この弁証法的論理が形式論理学の思考の原理のひとつである矛盾律(矛盾禁止の法則)といかに関係するのかというような問題が発生する。もちろんここでは、「方法としての弁証法」と「思想としての弁証法」というこの両側面は密接不可分の関係にあ

り、両者は切り離されるべきではない。いずれにせよ、本書では、弁証法的現実があってこそ、方法としての弁証法も成立するとされる（29頁以下）。ところで本書は、「矛盾」という概念よりも、「内在的否定性」の概念を強調し、この展開が本書の鍵となるという（30頁）。おそらく、矛盾概念は論理や方法としての弁証法により深く関わり、「内在的否定性」のほうは現実的思想としての弁証法により深く関わるのであろう。

二 弁証法に関する第一部の説明

さて本書の第一部は、啓蒙的な配慮に満ちており、いかにすれば初学者に弁証法とは何かをわかってもらえるかが意図される（もっとも、ヘーゲルもマルクスも弁証法も、読みこなすには、多少の努力は必要だと、のちに反省されている。325頁参照）。第一章は通常「否定」ということばの説明（「AはBでない」）から始めて、弁証法的な「内在的否定性」の説明がなされる。こうして、「内在的否定性」とは、事物の変化・区別がそれらにおける「自己否定」の運動によって基本的に成立することを意味する（41頁）。それと正反対なのが、事物の変化を外在的な作用連関で説明することであるが、これはやはり不十分な認識であり、この意味で事物の原因とは、実は「自己原因」以外のもんではありえないという。本書では、それでも形式論理学の説明も必要なかぎりになされ、さらに、ヘーゲル論理学冒頭の有・無・成の発展の論理も内在的否定性に即して展開される（57頁）。こうして本書では、かなり懇切丁寧に、工夫されて、弁証法や内在的否定性に関して説明がなされる。

第二章の有・無・成の説明から、続いて第三章では、現代物理学における「無」からの宇宙の誕生（いわゆるビッグバン）が詳細に語られる。ここにヘーゲル的な弁証法や内在的否定性の論理が明示されているということがいわれるが、評者には、この現代物理学の詳しい説明はおおいに勉強となった。

さて、「これこそ弁証法だ」といわれるとき、やはり矛盾の論理についての言及は避けられないが、それは第四章で述べられる。本書では、いままで強調されてきた「内在的否定性」とは、矛盾律（実は無矛盾律）に照らせば、自己矛盾的なものであると正当に述べられ（84頁）、矛盾律を絶対化する「矛盾律神話」（91頁）が明快に批判される。もっとも、著者はのちに「矛盾律」を丸ごと否定しているわけではないと断っている（344頁）。ともかく本書は、かつての「弁証法と矛盾律」論争をもう一度再現しようとはせず、この神話の根拠を、実在する事物の「自己同一性」とことばや記号そのもののもつ「自己同一性」とを混同し、後者を絶対化することに求めようとしている。これはある意味妥当だと思われる。だが評者によれば、この論争自体が無意味であるとい

うことではなく、弁証法の問題をこうした抽象的なレベルに終わらせないという態度が重要であろう*2。

第五章では、ヘーゲルの「論理的なものの三つのモメント」が説明される。この三つのモメント（契機）というのは、ヘーゲルや弁証法の研究者では周知のものであり、「悟性的モメント-否定的理性（弁証法）のモメント-肯定的理性（思弁）のモメント」の三つのモメントの展開をいう。弁証法の説明には、この箇所の紹介・検討は適切であると思う。そしてここで重要なのは、区別立てを旨とし、矛盾律を絶対化する悟性的モメントの「内在的超出」として弁証法的モメント、さらに肯定的理性のモメントが生ずることである。この「内在的超出」とは、いままで述べられてきた「内在的否定性」ということと同じであろう。

第一部最後の第六章では、発展の弁証法的論理、「即自-対自-即かつ対自」「肯定-否定-否定の否定」の展開の図式について説明される。これまた、ヘーゲル弁証法の説明に不可欠である。そのさい、「発展」については、評者はむしろ、本書 237 頁以下の三つの説明（①変化を貫く同一性がある、②変化を単なる否定と見ずに、それを同化して前進する、③変化はより複雑でより高度なものの形成・実現である）が的確・簡潔だという印象をもった。

三 第一部へのコメント

以上の入門的・解説的な第一部では、おおむね弁証法の最低限の説明が、ヘーゲルらに即してなされているといえよう。もちろん欠けていると思われるものをあげれば、弁証法の三法則、有論・本質論・概念論の展開、マルクス、エンゲルス、レーニンらの弁証法の多様な含蓄などきりがなが、たしかにこれで十分だという印象を受ける*3。そして本書では、用語の説明なども含め、わかりやすい配慮が多くなされている。それを認めたいうえで、読者の側からあえて印象を述べると、「内在的否定性」を説明するのに、「自己原因性」（41 頁）や「規定-非規定」（50 頁）というような抽象的な用語をただちにもち出すのは、読者にはややわかりづらいのではないかということである。というのも、そうするとさらに、これらの用語を説明しなければならないからである。「原因」とは、通例 A が B の原因であるというように、他者が原因であるとされるので、スピノザが強調した「自己原因」とは、自分が自分の原因であるということ、これはおおいに説明を要するパラドキシカルな事柄ではないかと思うのである。さらに「規定-非規定」という概念も、説明のための用語としてはわかりづらいのではないかと感じる。

さらにまた、第三章で現代物理学の対象となる自然現象にそって弁証法的説明が詳細になされたが、もしそうならば、エンゲルスの自然弁証法について一言触れてあげばありがたいという印象をもった。というのも本書では、第二部にあるように、資本主義的現実の弁証法的説明が中心であるので、第三章の現代物理学についても弁証法的説明が詳細に語られると、社会の弁証法と自然の弁証法があらためてどうつながるのかという疑問が出てくる可能性があるからである。たとえばここでは、マルクス・エンゲルスの「自然史的過程」(マルクス)の構想で、自然進化と社会発展が雄大なかたちでつながっている、などということ述べたほうがいいのではないかと思われた。

四 対象化の弁証法と疎外論

第二部の「人間存在の弁証法」は、三つの章立てにもかかわらず、むしろ第一部よりも大きな分量となっており、著者が力を注いだ箇所であろう。評者自身にも、おおいに参考となり、また考えさせられた部分を、第二部は含んでいる。

第七章は、まずはヘーゲルの目的論的世界観、カントの定言的命法などを例示しつつ、目的と手段の相互転倒という現象について語る(123頁)。これを前提に、疎外概念について、中国語、ドイツ語などに即して分析される(144頁以下)。ドイツ語の *Entfremdung* は、中国語では「異化」と訳されており、フランス語の *aliénation* は「権利や物件の他者への譲渡」と解される。そして通例、*Entfremdung*=*aliénation* であるが、本書では、このときの意味の差異に注目し、市民社会を形成するさいのホッブズの「自然権の譲渡」が、ヘーゲル的には、共同体的国家からの自己疎外となって現れると解釈される。だからこそ、*aliénation* は *Entfremdung* におのずと合致するのである。この箇所の説明は評者にはすっかりとはわからなかったところであるが、思うに、ホッブズでは、自然権をもつ個人は前近代の共同体から解放された、自己保存の原理で動く近代人であるが、古代ギリシャ的視点から遡って眺めるヘーゲルから見ると、この近代人は、(古代ギリシャなどの)共同体的国家から疎外された結果でしかない。つまりホッブズ的な自由意志をもつ近代人は、実はヘーゲル的には、共同体からの疎外態でしかない人間であると暴露されるに至る。

ところが本書では、興味深いことに、さらにヘーゲルを批判してそれを転倒させたフォイエルバッハがさらに登場する(149頁)。ここでホッブズの唯物論が、フォイエルバッハ的唯物論へと再転換される。フォイエルバッハによれば、ヘーゲル的な神的国家こそ、「疎外された〈人間の普遍的=類的本質〉」にほかならず、人間本質は「自然的な愛」を根底にもつ感性豊かな存在として位置づけられる(150頁)。ところがフォイ

エルバツハは、この人間疎外の原因を解明できない。その解明がマルクスの課題であって、「対象化活動」としての労働とその疎外論的把握から、唯物論の枠内でフォイエルバツハの不十分性が批判されるのである。評者によれば、マルクスは、フォイエルバツハ的唯物論とヘーゲルの弁証法をあらたに結合するのである。以上の近代思想史の流れは、深い含蓄をもって語られる。

こうして、第七章では、『経済学・哲学草稿』（以下『経哲草稿』と略記）など、マルクスによる人間の自己疎外の考察が徹底しておこなわれる。そのさい本書は、また訳語の問題にも触れて、Entäusserung を「疎外化」と訳すことを提起するが、そういわれれば、これは興味深い訳語ではないかと思われる（168 頁以下）。さらに、マルクス『経哲草稿』の第一草稿の断片「疎外された労働」における四つの疎外（労働生産物からの疎外、生産活動からの疎外、類からの疎外、人間からの人間の疎外）の詳細な分析はおおいに参照させていただいたし、同書に関して、いままで論争になってきた「私的所有がさきか、労働の疎外がさきか」（182 頁）という問題にたいしても、説得的な結論を出している。すなわち、「認識の順序」としては私的所有から疎外された労働へ（現象から本質へ？）であり、「事柄の順序」としては疎外された労働から私的所有へ（本質から現象へ？）であり、そして「のちになると、この関係は相互作用に変わる」（マルクス）、という解決の方向性も説得的である。この点、マルクスでは、以上のような丁寧な説明がなかったと補足される。本書では、（疎外をとまなう）この「人間の本質」はたえざる自己実現の目標であり、そこに人間の「責任」も、また「尊厳」もあると結論づけられる。これこそ、「人間主義」を唱える著者の重要な主張のひとつであろう。

豊富な内容をもつ第七章に関してこれ以上紹介・検討はできないが、本書で詳細に分析された *Vergegenständlichung*（対象化）と *Entgegenständlichung*（本書では「自己から切り離す対象化」と訳される）について気になったので、細かい話であるがあえて私論を述べさせていたいただきたい（160 頁以下）。というのも、評者自身、修士論文以来、『経哲草稿』の「ヘーゲルの弁証法および哲学一般の批判」の断片における「対象化を *Entgegenständlichung* として、すなわち *Entäusserung* として、およびその *Entäusserung* の揚棄としてとらえる」という箇所解明におおいに悩まされてきたからである*4。

本書では、この箇所を「否定の否定」の論理構造に対応させて

(1) 労働の対象化の開始（→肯定） (2) 自己からの分離的表出（＝自己喪失）としての対象化（→否定） (3) その外的分離の揚棄＝労働主体の自己確証としての对象的自己獲得（→否定の否定）と読解する（160 頁以下）。

その結果、国民文庫版の藤野渉訳の「対象性剥奪」(Entgegenständlichung に対応)は「誤訳」とであるとされる(161頁)。その理由は、上記の「否定」という第二段階において「対象性剥奪」という肯定的意味をもたせるのでは、第三段階の「否定の否定」の成立する余地がなくなるからというのである。もちろん ent という前綴りは「対向、離脱、除去」などの意味をもつ。上記の本書の三段階的解釈は明快であり、このかぎりで評者として賛同したいと思う。しかし、だからといって、藤野訳が「誤訳」とであるとまではいえないのではないかという感じがする。この点、教えを請いたいと願っている。

というのも、「対象性剥奪」と訳すことが、かならずしも肯定的意味に結果するとは限らないと思われるからである。要は、弁証法的にいて、「対象化」にたいする対立的意味を Entgegenständlichung が保持していることが必要であり、「対象化」という主体的行為で生まれたものが、現実世界でその対象化の実を喪失して、向こう側の客観的世界へと離れていくという否定的意味合いを「対象性剥奪」の用語はもつことができると思われる。そして、人間が形成したはずの世界が、その意味を失い、一度既成化された世界として屹立することは、歴史のなかで必然のことである。

以上のマルクスの文言をさらに解釈すると、そもそも弁証法的論理は、対立物の統一として二段階的に叙述もできれば、それを膨らませて三段階的にも叙述できると思う。この意味で、「対象化」とその反対の Entgegenständlichung との統一として、労働の論理の全体をとらえることが可能であるが、その第二段階からの回復を具体的に説明すると、第二段階からの第一段階への復帰ということで、「否定の否定」の第三段階の構想が生ずると考えられる(否定のなかの肯定的含蓄の明示)。これはヘーゲルでいうと、『大論理学』の本質論冒頭の「反省 Reflexion」の論理が措定作用(Setzen)と前提作用(Voraussetzen)の、対立物の統一とみなされるとともに、「措定-前提-措定の回復」と三段階的にも考えられるというのと似ている。いずれにせよ、Entgegenständlichung は、「対象化」と対立的な意味をもつということが肝要であって、それを「対象性剥奪」と訳すこともありうるので、適訳がどうかは別にして、かならずしも「誤訳」とはいえないのではないかと思うが、いかがであろうか。

マルクス『経哲草稿』は、あまりにも有名な著作であるが、それにもかかわらず、フオイエルバッハ、ヘーゲルらに影響されて、実は難解な表現が多く、いままでそこまで踏み込んで解釈されたことがあまりなかったと実感している。あえて私論を示した次第である。

五 支配と相互承認

第八章は人間間の支配と従属の関係を踏まえて、そこから「相互承認」の関係をいかに築くかが問題とされ、そのなかで人間の本質の実現としての民主主義と共産主義について論じられる。

周知のように、ヘーゲル『精神現象学』などで論じられる相互承認論は、他者論とともに、現代哲学につながるヴィヴィッドなテーマである。これを本書では、ホッブズにおける自己保存の欲望、力による支配、万人の万人にたいする闘争、などの主張に含まれるアポリアへの解決として議論しようとする。たしかにヘーゲルでは、ホッブズ的な問題提起が意識されていることであろう。ヘーゲルの主と奴の逆転関係の弁証法は、たしかにホッブズを念頭に置くと、わかりやすいと思われる。個人相互の「生死を賭けた戦い」の結果成立する人間関係は、支配と隷属の関係に終わり、その意味での非対称的承認関係に結果する。評者はヘーゲルの承認関係に、「差別的承認」「水平的承認」「垂直的承認」の三つが存在すると述べたことがあるが、ここでは主と奴という差別を残した承認関係が問題となっている。ヘーゲルでは、相互承認論は『人倫の体系』（1902-03年執筆）に初発的に見られ、『イェーナ五・六年草稿』、『精神現象学』（およびそれ以後も）などで展開される。『精神現象学』では、もう一か所、良心論における〈行為する良心〉と〈批評する良心〉のあいだで承認論が詳細に展開されるが、これは水平的承認関係といえよう*5。

本章では、奴のおこなう労働の意義が当然にも強調されるが、それでもこの箇所は、本質と現存在（Existenz）の関係の難解な議論（229頁以下）との絡みもあって、全体としてややわかりづらいものとなってしまったという印象をもつ。最後に本章では、マルクスの『ヘーゲル国法論批判』における「民主制・民主主義」と『経哲草稿』における「共産主義」が重なり合うことに触れられるが、これは興味深い指摘といえよう。これと関わって、本書ではやはりホッブズ、ロックと論じて来、結局ルソーの人民主権論は民主主義を徹底しきれていないと批判される。

六 疎外された「資本の論理」と物象化

本書最後の第九章は、人間の自己疎外の究極的形態としての「資本の論理」を徹底して批判的に明らかにするが、そのさいに、『資本論』の商品価値、価値形態の発展、物象化、価値増殖過程、搾取、剰余価値、本源的蓄積などの概念が詳細かつ丁寧に議論される。そして本章では、「暫定的総括」で示されるように、現代の問題意識として、市

場万能の新自由主義、マネー資本主義への批判がつねに念頭に置かれているといえよう。「マルクスは〈資本〉とはそれ自身の発生の秘密である〈自己矛盾〉をそれ自身の体内に言わば〈丸のみ〉して驀進するところの〈怪物〉である、として描き出そうとしているのだと思います」（295 頁）という簡潔な表現は、著者の矛盾論の考えとあいまって、まさに現代の新自由主義にも妥当するものとして、印象深いものである。

さて第九章では、とくに価値論、価値形態論が丁寧に説明され、そのなかに人間の自己疎外の萌芽が見られるとする。そしてその疎外現象が〈商品-貨幣-資本〉という発展過程のなかに、いかにしてその全貌を現すのかが示される。この『資本論』の解説のなかで、奴隷労働との対比で論じられる、労働者という「労働力商品」のあり方の指摘（297 頁以下）、さらに本源的蓄積過程における資本の残虐な本性の指摘（312 頁以下）などが、評者の印象に残った。というのも、これらの要素が、まさに本書でいう新自由主義の現在でこそ、苛烈なかたちで再現されているからである。対等の契約関係のもとでの、時間を限られた労働力の売買とはいっても、その長時間労働のなかで低賃金で働かざるをえない事態は、もうほとんど奴隷労働と変わらないといえよう。

そして世界を股にかけた新自由主義は、いわゆる後発国において、価値法則などを無視して、差別に基づく収奪をおこなって、資本主義形成期の本源的蓄積を継続しているといっても過言ではないと見られる。たとえば、ハーヴェイはマルクス主義的な批判的経済地理学の立場から、全世界における資本の支配と搾取を論ずる。これは、「略奪による蓄積」と呼ばれ、後発国の農民、先住民のみならず、「プレカリアート」といわれる先進資本主義国の不安定雇用の労働者もここに属する*6。事実、経済のグローバル化の過程で、途上国の債務は 1970 年から 2000 年までに 8 倍に増えた。国連の統計によると、豊かな国と貧しい国の経済格差は、1820 年には 3 対 1 であったが、1950 年には 4 4 対 1 となり、1990 年には 7 2 対 1 となったという*7。これは先進資本主義国による一方的な搾取、略奪の結果としか考えられない。そこには、ウィン・ウィンの関係はけっして見られない。

さて本章では、「資本の論理」を詳細かつ批判的に展開するなかで、マルクスの物象化 (Versachlichung) と物神崇拝の議論にも触れられる。そこでは、難解な物象化論に関して『資本論』の叙述がいくつか引用されるが、あまりかみ砕いて説明されていないようにも見える。いずれにせよ、本章では、「暫定的総括」のなかで、第一に物象化と物神崇拝の関係の問題、第二に物象化および物神崇拝と人間の自己疎外との関係の問題が提起され、議論されている（274 頁以下）。これが評者にとって興味深いので、この点について述べよう。

さて、「物象化」ということばは『資本論』全三巻を通じて4回、第一巻だけでは1回しか使われていないという(275頁)。上記の第一点に関しては、マルクス「ヘーゲル法哲学批判序説」が引用され、自己疎外の結果、「倒錯した世界」がまず存在するがゆえに、「倒錯した世界意識」である宗教もまた発生すると指摘される。こうして、「倒錯した世界」の客観的あり方が物象化の事態に対応し、「倒錯した世界意識」が物神崇拜に対応するということになる。だからここに、「反映される現実」と「現実の反映」という区別が見られる(277頁)。以上の物象化と物神崇拜の関係の説明は、おおむね説得的だったと思われる。そしてまた、物象化とは、人間とモノとの本来の関係が人間の自己疎外によってモノが主体となり、人間がモノにとっての客体となるというように転倒してしまっているあり方のことを意味すると定義される(279頁)。

第二点の疎外と物象化の関係についてはそれほど具体的に述べられていないと思われるが、いままでの叙述から明らかなように、本書では、疎外論的観点のなかで物象化のあり方が生ずるとされている。つまり「人間の自己疎外」が主客の転倒という物象化の事態を発生させるという主張である。この両者の関係でいうと、疎外論を中心に物象化現象をその帰結として議論する側に本書は立っているが、この点では、逆に、物象化論を中心にそのなかで疎外論を位置づける見方もあるので、ここに議論の余地がさらに見られる。

七 弁証法の現代的課題

以上のようにして、本書は、人間の自己疎外論の観点から、ヘーゲル、マルクスを中心的思想家として、弁証法の問題と絡めながら、近代・現代の人間の疎外および矛盾した現実を徹底して描いた。ここで、もし弁証法を現代で復興させようとするならば、こうした諸問題と向き合うべきであるということが、説得的に示されたのではないか。逆にいうと、自己疎外論と「内在的否定性」を強調する弁証法的方法こそが、鋭い現実認識をもたらす可能性をもっていると考えられる。その意味で、弁証法復興のモデルを著者は示すことができたといえるだろう。評者自身もこの点で、おおいに学ばせていただいた。

さて以下では、本書読了後に評者が提起すべき論点を三つあげて、簡単にコメントしたい。第一は、やはり疎外と物象化の関係の問題である。第二は、本書で中心的に論じられた、いわゆる『経哲草稿』などといわれてきたマルクスの著作の文献学的取り扱いの問題である。第三は、地球温暖化や原発事故などに見られる自然環境の破壊・汚染の問題である。

第一の疎外論と物象化論の区別と関係という問題は難問であるが、いま新しく提起されてきているといえるのではないか。というのも、MEGA (Marx-Engels-Gesamtausgabe) の編集・出版という新しい段階におけるマルクスらのテキストの再読解をもとに、いくつかの研究が現れているからである*8。

いままでに明らかのように、本書は、疎外を自己疎外として正当に押さえ、そこでいわゆる四つの疎外形態を展開した。いまや、廣松渉が指摘したような、マルクス自身によって初期の疎外論が克服され、問題意識が物象化論へと転換がなされたという見解は、『ドイツ・イデオロギー』以後、『資本論』にまで継続される疎外論的問題構成の存在の指摘によって否定された*9。同時に、物象化ないし物化 (Verdinglichung) の状況を、人間によって形成されたはずの制度やシステムが何か非人間的なものに転化した事態として、単純に解釈しないことが重要であろう。この点で、疎外論と物象化論の独自性をそれぞれ確保しつつ、両者をつなげることによって、いかに有効に資本主義経済体制を批判できるかが問題となる。

ところで本書では、「物象化」とは、人間とモノとの本来の関係が人間の自己疎外によってモノが主体となり、人間がモノにとっての客体となるというように転倒してしまっているあり方のことを意味すると定義された (279 頁)。だがこれでは、まだ疎外論の枠内にあり、マルクスの経済学批判を含んだ、現実的な物象化論に届かないのではないかという印象をもつ。マルクス自身によれば、物象化とは、労働を通じての人々の社会関係が、私的所有・私的労働の世界では、「物と物との関係という幻影的形態 phantasmagorische Form eines Verhältnisses von Dingen」として現れること、それが「人と人との物象的关系 sachliche Verhältnisse der Personen」として、「物象と物象の社会的関係 gesellschaftliche Verhältnisse der Sachen」として現れる事態をいう*10。ここでは、商品物象同士の関係のなかで、はじめて人々の社会的関係が見えてくることなどが念頭に置かれるだろう。資本主義における生産の無政府性が指摘される所以である。だから、疎外が主体・客体の二項関係であったとすれば、物象化は主体自身が二項的關係であり、それが物象的事態へ転倒するとみなされるのであるから、その論理構造が異なるといえる。これ以上は述べられないが、疎外と物象化を区別しつつ、両者の関係をさらに探究することが課題として立てられていることがいえるのではないか*11。

第二に、MEGAの編集・出版の経過のなかで、マルクス「ミル評注」を含みこんだ『パリ草稿』(従来『経哲草稿』などといわれたもの)が再吟味されていることである。いわゆる『経哲草稿』はMEGAの第二部に収録され、当時マルクスが同時に書きつけ

た「抜粋ノート」は第四部に収録されている。だが、ローヤーンの研究によれば、当時のマルクスは、多くの抜粋ノートを作成したあとで、この草稿を著作として書こうとしたわけではなく、事実として、両者は執筆の順序として入り交じっている。この両者に内容上の本質的な違いはなく、草稿も大きな抜粋を含み、抜粋ノートにもまとまったマルクスのコメントがあったりする。そして草稿の冒頭に掲げられてきた「序文」も、統一のある内容を前提として書かれたものではない。ローヤーンは結論する。「マルクスの1844年諸草稿〔いわゆる『経哲草稿』〕は、この時期の諸ノートから切り離された、明確な統一体とみなされるべきではない。」*12 だから、『経哲草稿』という統一のある草稿の全体は存在していず、それは多くの抜粋ノートとともに研究されるべきものとなる。とはいえ、マルクスが『パリ草稿』で展開した議論は、だからといって、緻密に分析される必要はないということはないだろう。それは相変わらず、深い理解を必要としているテキストである。

そのなかで、とくに「ミル評注」は、マルクス自身の経済学的な理論的進展と関わって重要な位置づけをもち、『パリ草稿』の執筆過程のなかのどの時点で書かれたのかが問題とされてきた。そこでは、労働の自己疎外のみではなく、より広く、商品流通世界における「社会的交通」「交換取引」*13 の世界が描かれる。そこで、山中隆次は『マルクス パリ手稿』のタイトルのもとで、従来の第一草稿の次に「ミル評注」を置いて再構成した。だが、いわゆる『経哲草稿』と「ミル評注」の執筆順序の関係には異論も多く、新MEGA版の編集者のインゲ・タウベルト、さきのローヤーン、田畑稔らは、第三草稿のあとに「ミル評注」を置いている*14 。評者はこうした論争に介入する能力をいまもっていないが、こうした文献学的研究の成果を踏まえたのちに、内容上の研究をおこなうべきであると考えている。

第三の自然環境の破壊・汚染の問題、つまり人間－自然関係にはらまれる問題をマルクス（主義）はどう見るのかという問題については、すでに『エコマルクス主義』*15 というような著作に見られるように、評者はすでに多くの議論をしてきたので、ここではくり返さない。本書で主張されたように、マルクスが「人間主義」の観点から「資本の論理」を告発してきたということは事実であるが、マルクスの問題意識は、階級的な差別や搾取など社会内の人間－人間関係を問題にしたのみならず、社会とその外側の自然の問題、つまり人間－自然関係も同時に回復しようとする、エコロジ的な発想をもっていた。

マルクスは単なる人間中心主義（anthropocentrism）者ではなく、事実として、人間主義と自然主義の弁証法的統一として、共産主義のあり方を考えていた。唯物論者マルクスにとって、社会の問題だけではなく、人間のあり方にとって自然の問題も同時に重

要であった。ところで本書にあった「疎外された労働」の第一規定は、単に労働者が生産物から疎外されているということのみではなくて、さらに広く、人間から「自然を疎外する」*16 という叙述を含んでいる。ここでマルクスは、「非有機的な身体」としての自然が存在しないと人間は生きられないということを強調するが、その基礎となる自然を人間から決定的に奪ったのが、資本主義形成期の本源的蓄積の過程にほかならない。自然、つまり土地から追い出され、遊離してしまった人間が土地との結合関係を取り戻すことが、ある意味、疎外の克服としての共産主義の運動であった。だから、マルクスの目標は、人間による人間からの搾取を廃絶するとともに、自然を商品化することをやめて、それを過剰利用したり汚染せずに、自然との健全な関係を取り戻すことであった*17。この意味で、最近では、エコロジー的なマルクス主義や社会主義の理論が発展してきている。

*1 『思想としての弁証法』窓社、2013年。以下、本文中に本書の頁数を記す。

*2 最近、ヘーゲル学会の招きで来日したクリスティーナ・エンゲルハルト氏がこの問題で報告し、そこで司会をした評者を含め、日本で一定程度議論となった。エンゲルハルト「ヘーゲル体系における矛盾の問題」（『ヘーゲル哲学研究』第16号、2010年）を参照。島崎「弁証法的矛盾概念と矛盾律の関係」（『ヘーゲル論理学研究』第16号、2010年）に論争の経緯と自説の展開が述べられている。

*3 評者の「弁証法」についての網羅的説明として、編集委員会編『マルクス・カテゴリー事典』青木書店、1998年、491頁以下の「弁証法」の項目を参照。

*4 MEGA I/2, S. 404. 山中隆次訳『マルクス パリ草稿』御茶の水書房、2005年、170頁以下。本書では、Entäusserung の代わりに、Äusserung と記しているが、誤記であろう。

*5 相互承認論に関する評者のものとして、島崎『ヘーゲル弁証法と近代認識』未来社、1993年、184頁以下、209頁以下を参照。承認論は近代的個性性を前提としつつ、単なる個人主義を克服するなかで展開されたと考えられる。ヘーゲル承認論の詳細と現代思想との関わりについては、片山善博『差異と承認』創風社、2007年を参照。

*6 デヴィッド・ハーヴェイ『資本の〈謎〉』（森田成也・大屋定晴他訳）作品社、2012年、301頁以下。

*7 ジョエル・コヴェル『エコ社会主義とは何か』（戸田清訳）緑風出版、2009年、28頁を参照。

*8 大谷禎之介『マルクスのアソシエーション』桜井書店、2011年。佐々木隆治『マルクスの物象化論』社会評論社、2011年など参照。

*9 廣松渉『マルクス主義の成立過程』至誠堂、1968年など参照。イシュトヴァン・メサーロシュ『マルクスの疎外理論』（三階徹・湯川新訳）啓隆閣、1975年。岩淵慶一『神話と真実——マルクスの疎外論をめぐって』時潮社、1998年。田上孝一『初期マルクスの疎外論』時潮社、2000年など参照。

*10 Vgl. Marx, Das Kapital, Erster Band, Dietz, S. 86, 87. 全集刊行委員会訳『資本論』大月書店、第一巻第一分冊、98頁以下を参照。

*11 岩佐茂編『マルクスの構想力』社会評論社、2010年における、I「疎外論のマルクス」における諸氏の議論が、この意味で注目される。

*12 ユルゲン・ローヤーン「どのようにしてひとつの理論が姿を現したか」（大谷禎之介・平子友長編『マルクス抜粋ノートからマルクスを読む』桜井書店、2013年）109頁。

*13 山中訳『マルクス パリ手稿』103頁以下。現段階では、同書が、いわゆる『経哲草稿』の最良の翻訳とされている。

*14 編集上の論争の経緯については、田畑稔「いわゆる『経哲草稿』の編集をめぐる論争経緯」（季報『唯物論研究』第102号、2007年）が詳しい。なお、田畑「『パリ草稿』最初の経済学批判・最初の共産主義論」（季報『唯物論研究』第124号、2013年）は、現時点でのわかりやすい総括である。

*15 島崎『エコマルクス主義』知泉書館、2007年。

*16 山中訳『マルクス パリ草稿』81頁。

*17 この点で、島崎「『経済学批判』『序言』における史的唯物論の『公式』について」（季報『唯物論研究』第114号、2010年）の、とくに第6節「史的唯物論と自然（史的過程）の問題」を参照。